

実践報告

技術・家庭(家庭分野)において 教師の問いかけが生徒の意思決定に与える影響 —第1学年「私は住まいのコーディネーター」の授業実践を通して—

山口 美紀* ・ 中西 雪夫**

Effect of Teacher's Question on Students Decision
in Homemaking Classes
Through a Lesson Study "I'm a Living Coordinator" for 7th Graders

Miki YAMAGUCHI* and Yukio NAKANISHI**

【要約】

技術・家庭科(家庭分野) 住まいの学習において、意思決定のプロセスに基づき、安全な住まい方を考えさせる。その際、自分が一番大切にしたい価値項目を決めさせたり、自分の決定に対する考えの根拠や理由を述べたり、それに対する他の人の考えを聞いたりする生徒同士の対話から安全に配慮した住まいを工夫させる授業において、教師の問いかけが生徒の意思決定にどのような影響を与えたのかを分析・報告するものである。

【キーワード】

技術・家庭科(家庭分野)、安心・安全な住まい方、意思決定プロセス、教師の問いかけ

1. はじめに

平成20年3月告示の中学校学習指導要領家庭分野住生活では、家族が住まう空間としての住居機能について知ることと家族の安全を考えた室内環境の整え方を知り、快適な住まい方を工夫できるとある。しかし、「特定課題に関する調査」(国立教育政策研究所、平成20年度)によると、安全に住まう工夫について考える学習が好きと肯定的に回答した生徒は50%と、他の内容より一段と低い傾向にある。さらに、安全に関する意識はあまり高くなく、新鮮な空気を流れやすくする窓の位置を考えたり、家庭内事故の要因を具体的に考えたりすることに課題が見られた。

そこで、安全に住まう工夫について日常生活を想定した場面を設定し、自分が身に付けた知識や技能をどう活用し、判断していくのかという意思決定の場面を題材構成の中に取り入れることで、状況に応じた判断ができる生徒の育成を目指す。

本研究は、家庭分野の住生活の内容において、生徒が意思決定プロセスを意識し、教師の問いかけに対して自分の学んだ知識からどのような意思決定をしているのかを分析し、授業づくりの改善を行うものである。

*佐賀大学文化教育学部附属中学校

**佐賀大学文化教育学部

2. 住生活の内容

(1) 家庭分野住生活における内容の改訂と家庭科学習の基本的な考え方

学習指導要領では、住生活の内容は、表1のように小・中の系統性や連続性がより重視された内容となっている。これまで課題選択となっていた「暖かさ・風通し・明るさなど」を「暑さ・寒さ・通風・換気及び採光」と改め、室内環境の整え方については、すべての児童に学習させることになった。また、整理整頓と清掃の内容

表1 小・中の住生活の内容

は小学校のみに整理された。これらの学習を踏まえ、中学校では、安全に重点をおいた室内環境の整え方について取り扱うこととしている。

家庭分野の学習指導では、基本的な概念の理解を深め、実際に活用する能力と態度を育成するために、実践的・体験的な学習活動が重視されている。題材の構成に当たっては、理論や考え方だけの学習に終わることなく、衣食住などに関する実習や調査などの実践的・体験的な学習活動を通して具体的に学習することにより、学習した知識と技術が生徒自らの生活に活かされることを重視している。

そこで、意思決定のプロセスに基づいて、自分の決定に対する考えの根拠や理由を述べたり、それに対する他の人の考えを聞いたりする生徒同士の対話から安全に配慮した住まい方を工夫できるように題材構成を考えた。

小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・整理整頓と清掃 ・室内環境の整え方(暑さ・寒さ・通風・換気及び採光)
中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・住居の基本的な機能 ・安全な住まい方の工夫(防災・幼児・高齢者) ・室内環境の整え方(化学物質・一酸化炭素。カビ。ダニなどによる室内空気の汚染・騒音が及ぼす健康への影響)

(2) 意思決定場面を取り入れた題材構成

住生活は、「持ち家」「集合住宅」などのように各家庭の経済状況や家族の住居観などの影響を受けるだけでなく、実際の生活でも、住まい方が多様化している。そのため、今までの学習指導では理論や考え方に重点をおいた題材構成となっていた。また住まいは、人の生活の基盤である。核家族化が進んでいる現代では、集合住宅のように地域・社会から閉ざされた空間に住まう人が多く、高齢者の孤独死が問題となったり、個人のプライベートを重視するあまり家族とのコミュニケーションが取りづらい住まいが増えたりしている。そこで、人にも環境にも優しい住まい方や住まいの安全性については、新聞広告やチャイルドメガネなど教師が入手容易な教材・教具を用いて体験的な学習を取り入れ考えさせることにする。そして、学習した知識をもとに日常生活を想定した場面の中で住まいの安全対策について提案させ、その提案について「なぜ、そのように考えたのか」という理由や根拠について批判的に質問したり、肯定的に質問したりすることで、最終的な自己決定をするような題材構成とした(表2)。

① 題材名 私は住まいのコーディネーター

② 題材の目標と評価規準

1) 題材の目標

自分や家族の住まい方に関心を持ち、家族が快適に安全に住まうための室内の整え方を知り、快適な住まい方の工夫ができるようにする。

2) 題材の評価規準

イ 多角的な視点から物事をとらえ、学んだ知識を活用し、家族の状況に応じた安全な住まい方の工夫を考えている。 【工夫・創造】

ウ 家族が快適に過ごすために、安全で、安心できる室内の環境の整え方と具体的な方法について理解している。【知識・理解】

ア 自分や家族の住まい方に関心をもち、学んだ知識を活用し室内環境の整え方や住まい方の課題に取り組もうとしている。【関心・意欲・態度】

③ 題材の授業過程(全8時間)

表2 題材の授業過程

過程	課題と内容 【言語活動】	時間	教師の指導・支援	評価と その方法
導入前	0 環境に優しい住まい方について調べてみよう。 (長期休業中の課題)	家庭	0 日本や佐賀の伝統的な住まい方や室内環境の整え方、省エネルギー対策について調査させておく。	
導入	1 今の住宅に求められているものは何だろう。 【問い】 家族にとっての「快適で安全な住まい方」とは? (パフォーマンス課題の提示)	1	1- (1) 「快適な住まい方」について付箋紙に書かせ、キーワードを出させる。 1- (2) 広告の見出しを参考に今の住まいに求められていることを考えさせ、住まい方の問題点を思考シートに記入させる。 1- (3) 「問い」やパフォーマンス課題を提示し、ゴールの姿を意識させる。	ア 快適な室内環境の整え方に関心をもち、快適で安全な住まい方に関する視点を考えている。【思考シート・ワークシート】
展開	2 環境に優しい住まい方について考えよう。	1	2- (1) 「環境に優しい住まい方」のレポートを班で発表させる。その際、快適に暮らすための「温度、湿度、換気、明るさ、音」の5つのキーワードに着目させ、メモを取らせる。	ウ 環境に配慮した住まい方に関して室内環境の整え方と住まい方に関する具体的方法を理解している。【ワークシート・ペーパーテスト】 イ 多角的な視点から、快適で安全な住まい方の工夫を考えている。 【発表・ワークシート】
	3 安全な住まい方を考えよう。	4 (本時) 4/4	2- (2) 5つのキーワードについて、どんな工夫をすればよいか考えさせる。 3- (1) 幼児疑似体験や阪神・淡路大震災のVTR、家庭内の事故についてのデータなどから、事故の原因と対策を考える。その際、快適で安全な住まい方の工夫について「安全の工夫、室内の換気、安心な暮らし」の3つのキーワードを押さえる。 3- (2) 鳥瞰図を用いて、ある三世代家族の住まい方について3つのキーワードを使い、改善策を考えさせる。その際、室内環境を3つのテーマ(居間・食堂・台所、浴室・トイレ・廊下・玄関、個人部屋)に分け、班で考えさせる。 3- (3) 浴室・トイレ・廊下・玄関、個人の空間の改善策について意見交換させる。 3- (4) 班での意見交換を通して、自分の考えを再考させる。その際、自分が選んだ改善策について根拠を述べながら意見を言わせる。	
	4 快適で安全な住まい方を提案しよう。 (パフォーマンス課題)	1	4 パフォーマンス課題について考えさせる。その際、事故の防ぎ方の具体策を考えるようにさせ、整理・整頓の重要性についてもふれ、小学校での学習と結びつけて考えさせる	イ 学んだ知識や技術を活用して安全な住まい方の工夫を考えている。 【思考シート・レポート】
展望	5 題材の振り返りをしよう。	1	5 「問い」に対する自分の考えを書かせ、学習のまとめをする。	ア 自分や家族の住まい方に関心をもち、学んだ知識を自分の生活に生かそうとしている。【発表・ワークシート】

意思決定する場

3. 意思決定

(1) 授業における意思決定と意思決定プロセス

授業では、その多くの時間が教師の発問と生徒の応答で成立する。教師の発問は、その目的が明確でなければならず、生徒がこれまでに得た知識や経験を刺激し、新たな知識を導くものでなければならない。近藤清華氏は、教師は生徒の応答に瞬時に何らかの決定をして次の発問につなげおり、この瞬時の意思決定が授業の成否に大きな影響を与えると述べている。つまり、発問に対する生徒の応答後に、どのような内容でどう問いかけるのかが生徒の学びに大きく影響をするということである。したがって、児童生徒の応答から次の発問をする際、どの手段を選択していくのかという瞬時の教師の意思決定が重要となり、生徒の意思決定の評価をしながら時には、方向転換を迫られる場合もある。

そこで本時の授業について、生徒の応答後、教師が次の発問をする瞬間、どの意思決定プロセスを意識したと考えられるか、また、意思決定プロセス④において自分の意見を主張するような主観的な意思決定をしているのか、他者の意見を取り入れ、客観的な意思決定をしているのかについて分析してみた(表4・表5)。また、教師の問いかけに対する班での話し合いでの意思決定についても分析してみた(表6)。

なお、意思決定プロセスについては、佐藤文子氏が述べる「問題を明確にする」「必要な資源・情報を収集する」「複数の選択肢や方法を考える」「各選択肢の成り行きを主観的・客観的に比較考量する」「意思決定」「決定を再評価する」「決定を再評価する」の6つのプロセスを参考にした(表3)。

表3 意思決定プロセス

- | |
|---------------------|
| ① 問題を明確にする |
| ② 必要な資源・情報を収集する |
| ③ 複数の選択肢や方法を考える |
| ④ 各選択肢を自他の立場や見方で比べる |
| ⑤ 行動する(意思決定する) |
| ⑥ 結果を評価する |

表4 教師の発問と生徒の応答

時間	発問	応答	意思決定プロセス	生徒の意思決定プロセスに対する考察
0:00				
14:30	他にありませんでしたか。		②	
18:36	それでは、バス、浴室の提案にいきますよ。		①—⑤	
	5班の提案はどうでしたか。	はい、床をタイルにする。	②—③	選択肢は増えているが、選択した理由が不明なため、班からの提案を聞いた情報から思いつくまま発言をしていると考えられる。
	床をタイルに、他には?	換気をする	⑥—②—③	
	換気をする。他には?	カギをつける。	⑥—②—③	
	カギをつける。他に。	手すりをつける。	⑥—②—③	
	手すりをつける。いいですか。		⑥—②—③	
	6班はどうですか。	引き戸にする。	②—③	
	引き戸にする。他には?	乾きやすさの床。	⑥—②—③	
	乾きやすさの床。つまり、床の素材を工夫しようということね。○ ○くんどうぞ。	お風呂にフタをする	⑥—②—③	

19:50	お風呂にフタをする。ここで六班さん、フタをするのはなぜですか。	子どもの溺死を防止するためにフタをします。	⑥—②—③	選択肢の理由は明らかだが、本当にその選択肢で事故が防止できるか、もっと他の選択肢はなかったのかを考えていない。
	わかりました。他に六班さんの提案、ありませんでしたか。	手すりをつける。	⑥—②—③	教師が安易に評価して、次に進めている。
25:57	こういう提案がなされました。そしたら、この玄関・浴室・トイレの中で一番、危険度、事故に遭う確率が高い場所はどこ?	お風呂	⑥—④—⑤	理由が不明なため、主観的な意思決定のなか、客観的な意思決定なのかわかりづらい。
	お風呂、 どういう事故が予想される?	転倒、溺死、気分がわるくなる。	⑥—②—③	

表5 教師の発問と生徒の応答に見る意思決定プロセス

意思決定プロセス	回数
① 目標を明確にする	41
② 必要な資源・情報を収集する	68
③ 複数の選択肢や方法を考える	47
④ 各選択肢を自他の立場や見方で比べる	2
⑤ 行動する	40
⑥ 結果を評価する	47
⑦ 思うような効果が得られない場合には、さらなる意思決定を行う。	0

この授業では、意思決定プロセスの②がもっとも多く、約27%であった。例えば、「玄関の提案、5班はどんな提案をされましたか」「お風呂、 どういう事故が予想される?」などである。この意思決定プロセス②や③の発問は、生徒が何を知っているのかという情報を教師が得ることにつながり、教師は、それらを踏まえて次の発問を決めることができる。ここでの教師の問いかけは、他の選択肢を出させることのみとなっており、「なぜ、その選

択肢を優先するのか」の理由を問うことをしていない。本来、意思決定プロセス②や③の発問は、授業の方向を転換するような役割があり、生徒の発言を増やすことにつながるが、教師が意識して問いかけを行っていないため、表4より、意思決定プロセス②や③が多い割には、主観的な意思決定となっている。

表6 教師の発問と班での話し合い

時間	教師の発問	A班	プロセスの考察	B班	プロセスの考察
29:36	班での話し合いの様子				
	各自が考えた対策をもとに今から班で意見交換してください。浴室の安全対策は、1番優先すべきは、これと、話し合った結果を書いてください。必ず、どうしてそう思ったのかという理由を書いてください。話し合う時間3分をお願いします。	A男：僕が選んだ提案は、すべり止めをつける。理由は、溺死はよっぽどのがないと起こらないが、滑るのは、どうしたって滑るので、そちらを防いの方がよい。	溺死は、よっぽどのがないと怒らないという主観的な意思決定である。	S子：何を選びましたか。	選択肢を問うている。
		B子：わたしが選んだ提案は、警報機です。理由は、危険からのがれることができるから		どのような点で危険から逃れられるのか不明で、主観的な意思決定である。	

		C男 ：換気せんで、床を乾かすことをした方がいいと思う。乾くので滑らないと思うよ。	学習した知識を活用した客観的な意思決定である。	F子 ：O男くんは？	選択肢を問うている。
		D子 ：私が警報機をつける理由は、転倒しても気絶したりしない限り助けを呼べるし、気分が悪くなったら、すぐにひとを呼ぶことができるから。	転倒しても気絶しない限り助けを呼べるのか、わからないので主観的な意思決定である。	O男 ：警報ボタン	主張に対する理由がない
		B子 ：どれにする？	選択肢を問うている。	S子 ：なぜ、そう思ったのですか。	判断した理由を問うている。
		C男 ：警報機・・・	主張に対する理由がない	U男 ：具合が悪くなっても知らせられるし、逆になかったらそのまま・・・息ができないまま、おわっちゃう たおれちゃうと押せないよ	本当に具合がわるくなって知らせることができるかあまいで、主観的な意思決定である。
		C男 ：今思いついたけど・・・	自分の経験を言っている。	U男 ：でもさ、警報ボタンってない？	主張に対する理由がない
		D子 ：何？	選択肢を問うている。	S子 ：ある	主張に対する理由がない
		C男 ：溺れて死ぬのはさ・・・なんというの・・・一瞬じゃん。でも、転倒したら、いたいという感情があるじゃん。	主観的な意思決定である。	U男 ：呼び出しって書いていない？	今までの経験を言っている。
		D子 ：溺れて死ぬのがこわいですよ。	主観的な意思決定である。	S子 ：ある ある	主張に対する理由がない
		B子 ：理由何？	判断した理由を問うている	O男 ：病室とかにある	今までの経験を言っている。
		A男 ：危険からのがれられる	主観的な意思決定である。	U男 ：あれさ、ぶっ倒れたら押せくない？	主観的な意思決定である。
		D子 ：助けを呼べる	主観的な意思決定である。	O男 ：即死の場合は・・・	
		B子 ：危険が身に迫ったとき？	判断した理由を問うている	U男 ：手が届きやすいところにあるみたいな。	今までの経験を言っている。
		C男 ：僕が考えた理由は、こけて、危険で1分1秒おしい時、命が助かることがあるから。	主観的な意思決定である。	M子 ：床の素材 だって、床の素材を滑りにくいようなやつにしたらスペンないし、ケガも防げるから	学習した知識を活用した客観的な意思決定である。
		A男 ：人を呼び、助けをもらうことができるから。	今までの経験を言っている。	S子 ：換気で、換気とかしないと、気分がわるくなったりする可能性がある	主観的な意思決定である。
		※この班の結論は、警報機となった。		U男 ：さぁ・・・どれにしよう	選択肢を問うている。
				※この班の結論は、多数決で警報機となった。	

表6は、教師の発問に対して、意思決定プロセスに基づいて班での話し合いがどのようにされたのかを表している。意思決定プロセス④において、主観的な意思決定をしているのか、客観的な意思決定をしているのかについてA班とB班の話し合いを分析した。A班もB班も結論は、風呂場の安全を考えると、もっとも優先すべきものは「警報機をつける」と結論を出している。A班・B班ともに主観的な意思決定が多く、学習した知識が活用されていないが、決め方を見ると、A班は、主観的な理由とはいえ、ほとんどの生徒が何等かの理由を述べながら、決定までしている。B班は、多くの選択肢が出ているが、決めた理由が不明なものが多く、今までの経験など直観的なものが多い。そのため、この班の意思決定は、話し合いの時間がきてしまったため、多数決による決定となってしまうのだと思われる。

高まる話し合い活動となるためには、例えば、「生徒の家庭にどれだけの警報機が設置してあるのか」という生徒の実態把握をしておき、判断材料を教師の方で投げかけたり、理由が不明であるなら、理由を問うことを司会している生徒に促すなど、話し合い活動に教師介入していったりして、話し合いの質を高める必要がある。

(2) 授業後の生徒の考え

この授業を振り返って、授業を受ける前までとどのように意見が変わったのかをまとめた(表7)。

表7 授業後の自分の考え

キーワード	授業を受けて自分の考えが変わったところ
家族の状況	今までは家族のことを考えず、自分中心の生活送っていたけど、これからは <u>家族のことを考えて</u> 生活を送ろうと思う。(5)
	一人だけに合わせるだけだと、不十分だと思っていたが、意外と <u>全員の安全</u> につながっていることが分かった。(1)
	安全意識をもつ。 <u>周りの人</u> に気配りをする(1)。(A男)
	自分達だけにいいものでなく、 <u>老人や子どもに配慮</u> した方がよい。(1) (C男)
安全な暮らし	危険は身近にあると感じた。(1)
	<u>浴室やトイレでも危険</u> があることがわかり、安全に気をつけようと思った。(3)
	日常生活の中でそんなに危険はないと思っていたけれど、自分のことだけでなく、小さい子やお年寄りにも <u>快適に暮らすことのできる工夫</u> が必要だと思った。(1)
	<u>安全</u> に対する意識が強くなったと思う。(1)
	自分の家で改善できそうなものは何かなど、 <u>安全と安心</u> を意識するようになった。(1) (D子)
安全の工夫	安全に配慮した <u>住まい方を実行するために自分達にもできる</u> 窓開けやお風呂の水抜きなど小さなことからでも実行することが大切だと思った。(8) (B子)
	簡単だが効果のある <u>暮らしの工夫</u> をしたい(2)
	授業前はあまり工夫する点はないと思っていたけれど、授業を通して <u>安全に対する対策</u> がたくさんあることがわかりました。(1)
その他	私たちが快適で安全に暮らせるのは、人のおかげだと改めて考えた。(1)

表7からもわかるように、学習前までは自分が中心で家族の一員として考えていたが、学習後は、家族全員の状況を考え、自分たちにできることは何かを考えて決定しているのがわかる。小学校の「してもらう自分からできる自分へ」から中学校「生活の自立」といわれているように、家族の状況等を考え、よりよく生活するために自分でできることを積極的にするような生徒を育てたい。

4. 指導のあり方

授業実践をもとに、授業案を修正した。今回の題材構成では、幼児疑似体験のみの体験活動であったため、自分の考えについて根拠をもとに話し合うことができていなかった。そこで、「3 安全な住まい方を考えよう」で、幼児疑似体験だけでなく、高齢者体験や学校内の安全について調査等を取り入れ、体験したことを根拠に話し合いができるようにする。また、住まいの学習における基礎・基本の見直しもするべきである。ただし、時間数は増やすことができないため、鳥瞰図を用いて、ある三世代家族の住まい方について改善策を考えさせる際、住まいの中で最も危険度が高いと思われる場所に限定をさせて考えさせることにする。また、本時の授業過程については、表8のように修正する。

表8 本時の授業過程の修正

過程	学習活動と内容 [言語活動]	形態	教師の指導・支援	修正
導入	1 本時の学習課題を把握する。	斉	1 教科連絡委員の司会により、前時までの学習の確認をさせる。	
	課題：安全な住まい方について、意見交換をもとに自分の考えを再考しよう。			
展開	2 本時の活動を把握する。		2 本時の学習の流れを簡単に説明する。	
	3 テーマ「玄関・浴室・トイレ・廊下」の改善策を提案する。	斉	3 3つの班に自分達が考えた改善策の提案をさせる。その際、安全のキーワードと解決策の根拠を発表させる。 ・司会を教科連絡委員にさせる。 ・発表順は、5班→6班→7班とし、発表時間は1班2分以内とする。 ・フローア-は各班の改善策についての良い所ともう少し考えた方が良い所を付箋紙に書き込みながら、聞かせる。	・提案をさせる際、他の班の提案と同じ提案については、提案を省かせる。 ・フローア-は、良かった所と、その提案が分かりにくかった所、もう少し考えた方が良い所を付箋紙に書きながら、班ごとに分類させておく。 ただし、付箋紙は、各班の提案ごとに各自2枚までとする。
	4 班での意見交換を通して、よりよい改善策を選ぶ。	個	4-(1) 3つの班の提案からふさわしいと思う改善策を各自で選ばせる。	・班での話し合う時間を今回は3分しか取れなかったが、5分間話し合う時間を取る。 1) 意思決定④のプロセスを意識し、他の人の見方や考え方と自分の考えを比べさせるために、安全対策の場所を限定したり、題材構成3-(1)において、体験活動を増やし、

		G	4-(2) 各班の改善策の良い所・もう少し考えた方がよい所について班で話し合わせる。	その体験に基づき、理由や根拠を述べられるように工夫したりする。 2) ワークシートの工夫で自分の考えと友達の考えが比べられ、ひと目でわかるようにする。 3) うまく話し合いができていないところは、教師が介入し、話し合いがスムーズにいくようにする。
		斉	4-(3) 各班の良い所・もう少し考えた方がよい所を発表させる。	・全体協議については、同じ意見については、次の班は言わないようにして、意見の異なるもので考えさせ、自分たちの意見と比較して考えさせる。 ・この全体協議の時間は、8分間確保できるように、前半の時間の使い方の工夫をする。
		G	4-(4) 自分が選んだ改善策について根拠を述べながら意見を言い、その意見に対して批判的に考えさせ、班でよりよい改善策を選ばせる。	4) 意思決定④のプロセスを意識し、他の人の見方や考え方と自分の考えを比べて意見を言わせるために、友達の意見の理由から判断材料を見出せるように、教師の問いかけを工夫する。
	5 家族の状況に応じた安全な住まい方について考える。	斉	5 安全な住まい方について、班での意見交換を参考に、安全キーワードを使い、自分の考えをまとめさせる。	
展望	6 自己評価する。	斉 個 斉	6 授業を振り返らせ、家族が安心して暮らせる住まいは、建物の構造や施設設備だけに求めるものではなく、家族で住まい方を工夫してつくっていくものであることに気づかせ、これからの自分の生活の決意を記入し、自己評価させる。	
	7 次時予告を知る。		7 次時は、パフォーマンス課題に取り組むことを告げる。	

表8に授業の進行上の修正と意思決定プロセスにおける修正(網掛けの部分)を行った。意思決定プロセスによる修正箇所は2箇所である。1箇所目は、「4-(2) 各班の改善策の良い所・もう少し考えた方がよい所について班で話し合わせる」場面である。ここでは、他の人の見方や考え方と自分の考えを比べさせるために、ワークシートの工夫をし、自分の考えと友達の考えが比べられ、ひと目でわ

かるようにする(表8 1) 2) 3))。また、話し合いがうまくできていないと思われる班には、方向転換をするような教師の問いかけをしたりする。2箇所目は、「4-(4) 自分が選んだ改善策について根拠を述べながら意見を言い、その意見に対して批判的に考えさせ、班でよりよい改善策を選ばせる」全体協議の場面である(表8 4))。ここでも、友達の意見の理由から判断材料を見出せるように、教師の問いかけを工夫する必要がある。

5. おわりに

住まいの学習を通して、自分だけでなく、家族の状況を考えた家族員の安全という視点をもつようになった生徒が増えたり、小学校で学んだ知識、通風や換気、採光などを考えるとともに、中学校で新たに学んだ安全というキーワードで自分の家の住まい方を見直した生徒が多く見られたりしたが、授業中の意思決定については、学んだ知識の定着ができておらず、その知識をもとに、自分の選択肢を選んだ理由が不明であったり、今までの経験から意思決定をしている場面が多く見られた。

意思決定させながら学習を深めるために、基礎・基本をもう一度洗い出しや体験学習・調査活動の充実を図る必要がある。また話し合う際には、相手の意見を聞きながら自分の意見とどのように違うのかを考え、相手の意見についてわからなかったことなどを聞くようにさせるなど、問いかけを工夫する必要がある。

授業は、教師と生徒で作上げるものである。生徒の意思決定は、教師の問いかけの影響を受けるため、教師の問いかけは重要な役割をもつ。生徒の意思決定がよりよいものとなるように、どのような問いかけがよりよい意思決定に結びつくのかを引き続き、研究するべきである。

【参考文献】

- 荒井紀子 鈴木真由子 綿引伴子編著 『新しい問題解決学習』 教育図書 2011.
佐藤文子編著 『家庭科教育における意思決定能力』 家政教育社2009.
文部科学省 『中学校学習指導要領解説 技術・家庭編』 2008.
文部科学省 『小学校学習指導要領解説 家庭編』 2008.